

エッセイ 還暦を過ぎた旅と小さな出会い 第4回

NPO 法人「社会総合研究所」会員

桜井 良

8. パリ滞在記

2016年7月末から8月上旬にかけて、家族4人でパリ市内とベルサイユ宮殿、そして第3回で述べたレオナルド・ダ・ヴィンチが最晩年を過ごしたロアール川流域にあるル・クロ・リュセまで旅した。

初めてのパリ そして歌手シャルル・アズナブール

私が初めてパリを訪れたのは、残り2週間で24歳となる1971年11月1日だった。デュッセルドルフでの工場研修が夕方に終わり、それからパリに向かい、オルリー空港に到着したのは、夜10時を過ぎていた。その当時、シャルル・ド・ゴール空港は工事中で、開港は3年後の1974年になる。

入国手続きを済ませ、ゲートを出ると、そこには入国者を出迎える多くの人々がいた。その中のひとりの中年の男性が、ゲートを出たばかりの若くきれいな女性を見つけて進み寄り、やさしく抱擁し、キスする光景を見かけた。かっこよかった。これがパリなのだ。「とうとう憧れの花の都パリに来たんだなあ」と思った瞬間だった。

翌日は、ブローニュの森に近いホテルで一日中、ワークショップが開かれた。地元のパリだけでなく、ロンドン、ストックホルム、フランクフルトなどからの参加者10名に混じって、日本人は私一人だけ。心細かった。また、互いの国の言語の訛りの強い英語を聞かされ（相手にすれば日本語訛りの拙い英語を聞かされ）、午前中だけで私はすっかり疲れ切れってしまった。昼食にワインが供されたが、飲んでしまえば軽く酔い、眠くなり、午後の会議は耐えられないものになる。我慢して飲まなかった。

慣れない会議から解放されたのは7時を回っていた。その後、出席者全員がエッフェル塔の1階、といっても地上57mのレストランに招待された。私は、昼食の分を取り戻すかのようにワインを楽しみ、各種のチーズを堪能した。宴たけなわになったとき、フロアにひとりの男性が現れ、シャンソンを歌い出した。「あれ？ あの人は昨夜、空港で見かけた人ではないか？」。隣席のフランス人に聞くと、シャルル・アズナブール(1924-2018)というフランスでは有名な歌手だと教えてくれた。不覚にも、私は知らなかった。当時、日本ではまだ人気が出ていなかった？ その後、彼の歌は日本でもよく聞かれるようになった。シャルル・アズナブールはヒット曲が多く、映画出演も数多いので、ご存知の方は大勢いらっしゃるのではないかと。晩年に近い2016年には、来日公演も果たしている。私が最も好きな歌は、『忘れじのおもかげ(SHE)』だ。

ムスリムのテロ反対への意思表示

さて、2016年夏のパリ旅行に話を戻す。

パリでは、パリ同時多発テロ(2015.11.13)を契機に警戒レベルが高くなり、銃で武装した兵士が数人単位でパトロールする姿を、名所旧跡は当然として、街中でも、メトロでも、至る所で見かけた。

7月16日の南仏ニースで、花火見学者にトラックが暴走し、80人以上が犠牲となったテロ事件が

あったが、私たちがパリに滞在中、ニースのカソリック教会で行われた犠牲者の追悼式のニュースを、ホテルのテレビで見た。教会には、ムスリムの人々も多く参列していた。男性は髭をたくわえた正装、女性はヒジャブを被っているため、ムスリムとすぐ分かる。教会の外ではムスリムの人々が、「イスラームはテロに反対する」というプラカードを掲げて行進していた。

7月9日の社会総合研究所の定例勉強会で、会員から次のような発言があった。「イスラームの世界から『テロに反対する』『紛争を平和的に解決する』という声は、ほとんど聞かれない。例えば、ローマ法王がカソリック信者に対して平和を呼び掛けるように、イスラームの宗教指導者が中心となって、ムスリムの人々に反テロの呼びかけをしないのはなぜか?」。イスラームは、カソリックに見られる教会組織も法王も持たないので、組織化された活動という点では、日本のメディアにほとんど報じられない。しかし実際には、ムスリムの意思表示は、さまざまな形でなされていると感じた。

あまりにも親切な・・・野菜店の店主

私たちは、物価の高いパリ中心部を避け、パリ東南のイヴリー=シュール=セーヌ地区にホテルを取った。この地区には北アフリカや中東からの住民が多く住んでいるようで、あちこちでアラビア語の店の看板を見かけた。

ホテルには洗濯のルームサービスがなかったので、数日おきにコイン・ランドリーを利用する必要がある。洗濯物が溜まったある日の夕方、Goggle Mapでホテル付近のコイン・ランドリーを探した。双子の孫娘を連れて洗濯物が詰まったバッグを肩にかつぎ、徒歩7分と思われるコイン・ランドリーがあるべき通りに行ったが見つからない。通り過ぎたかな、と思い、数回行き来するが、それでもそれらしい店は見つからない。思案気に目線を泳がせると、アラビア語の看板を掲げ、野菜や果物を売っている40歳らしき店の主人と目が合った。ニコリ笑っている。そうだ、この人に聞いてみよう。この近くにコイン・ランドリーがあるはずだが、知っていますか?すると教えてあげるから付いて来て、と身振り合図し、スタスタ歩き出した。私と孫娘は後に付いて行ったが、数分歩いても到着しない。なんか変だなあ?やがて店主はメトロの入口に入り、どんどん階段を降りて行った。そこで私は気付いた。店主は、私たちはメトロ乗場を探していると勘違いしているのだと。先ほどの道を尋ねた私の英語は通じていなかったのだ。私は身振り手振りで、「違う、違う、ランドリー」と言っても理解してもらえない。店主も、行きたいところはメトロでないことは分かったようだが、さて、それならどこへ案内すればいいのか困惑した表情。仕方なく、私はメルシーとだけ言って店主と一緒に元の方向へ引き返した。すると何のことはない、途中にコイン・ランドリーがあるではないか。看板もなく、間口も狭く、しかも通りからは内部がよく見えない造りなので、私は見逃してしまったのだ。ここが探してした場所だと店主にジェスチャーで示すと、ニコリしてお店に帰っていった。私は、なんて親切なのだろうと思った。お店を空けて、私に道案内してくれるなんて。

余談になるが、誤解して案内してくれたメトロは「Pierre et Marie Curie」駅だった。ノーベル賞を受賞した有名な物理学者ピエール・マリー夫妻が近くに住んでいたことから、この駅名が付けられた。

話はそこで終わらない。コイン・ランドリーで洗濯が終わり、乾燥機を回そうとしたとき、店内にいたアラブ系と思われる青年が、「私の洗濯物も一緒に乾燥させてくれませんか?」と懇願する眼差しで話しかけてきた。手には少量の洗濯物を抱えていた。乾燥機に使う小銭を切らしてしまったという。仕方なく、

一緒に乾燥機に入れた。たぶん、小銭を節約するため、親切そうな日本人が近くにいたので、ダメ元で頼んでみたのだろう。

優しい雑貨店の店主

パリ市内の観光を終えた夕方の帰りは、最寄り駅のメトロ「Porte d'Ivry」駅で降り、ホテルまでの途中にある小さな雑貨屋に寄ってワインとチーズを買うことにしていた。そして店に入るたびに、店主のご主人は双子が可愛いとみえて、ニコニコと笑みをたたえながらいつもキャンディーをプレゼントしてくれるのである。店主は、北アフリカか中東からの移民のように見えた。



アルジェリア出身の優しい雑貨屋の店主。双子が店に入ると、いつもキャンディーをくれた。

2回目に行ったとき、ワインのコルク抜きを借して欲しいと頼んだ。ホテルの部屋にコルク抜きがなく、開けるのに苦労したからである。この店でコルクを開け、そのままホテルで飲むつもりだった。しかし、持っていないという。

「エッ!? 持っていない? フランス人はみなワイン好きじゃないの?」

「俺はお酒は売るが、自分では飲まない」

「失礼ですが、ムスリムの方ですか」

「そうだ」

「フランスに住むムスリムは飲むんじゃないの?」

冗談めかして言うと、そういう人もいるが、自分は飲まないと言った。不躰とは思いつつ、出身を聞いたところアルジェリアだった。

店主と私のやり取りを聞いていた店内にいた背の高い青年が、「コルクを開けてあげますよ」といって近寄り、ポケットから万能ナイフを取り出し、ひょいひょいとコルクを開けてくれた。店の主人は、この青年は近所に住み、同じくアルジェリアから来たと教えてくれた。店主も青年も、私の家族に親切にしてくれた。

オペラ座前で「上を向いて歩こう」を歌う

「優しい雑貨店の店主」には続きがある。ワインのコルクを開けてくれた青年は、ギターケースを持っていた。「ミュージシャンですか？」と聞くと、腕前はそれほどないが、ときどきストリートで演奏するという。ヨーロッパ各地では、ストリート・ミュージシャンをよく見かける。

2日後、オペラ座を見学した。妻がシャガールの絵が好きなので、天井に描かれている彼の絵を見るためだった。前年の2015年夏にドイツのマインツに行ったときも、シャガールのステンドグラスを見るために丘の上にあるサン・ステファン教会まで登ったことがある。

見学が終わり、表通りに出たとき、ひとりの青年が路上ライブをしていた。よくよく見ると、雑貨屋で親切にしてくれた青年ではないか。私たちに気付くと、手を振り、曲目を「上を向いて歩こう」(Sukiyaki)に切り替え、一緒に歌って欲しいと合図した。ややお調子者の妻は、差し出されたマイクを握り、彼の隣に陣取って歌い始めた。双子は、顔を真っ赤にして恥ずかしかった。

オペラ座の前で堂々と「上を向いて歩こう」を歌う妻。



メトロでスリに遭う

モンマルトルへ行った。ムーランルージュを発着地点とする天蓋のない小さなトロッコ列車に乗って、モンマルトルを一周しながら街の風情を楽しんだ。サクレ・クール寺院からはパリ市内を一望できる。石畳のテアトル広場へ行くと、観光客の似顔絵を描く画家が大勢いた。私たち家族を見かけると、数人の画家が近寄り、80ユーロで書かせて欲しいと互いに言い寄ってくる。私には、その額が妥当なのか法外なのか分からない。「いや結構です」と断っても、勝手に描き始め、画家同士の過当競争の様相を呈している。その中に、髪を後ろに束ねた中年の女性画家がいた。孫娘を観察していたらしく、双子かと聞く。そうだと答えると、80ユーロで二人分の似顔絵を書くと言い出したので、断り切れない私は、渋々、妥協した。モンマルトルに来た記念になるし、まあいいか。



モンマルトルの女性画家。双子の姉（左）が照れた顔をしている。妹（右）はそれを冷やかしている。

モンマルトルにはスリが多らしい。街角の至る所に「スリに注意!!」の貼り紙があった。近くのカフェで私たち夫婦はコーヒーを飲み、双子はアイスクリームを食べて一休みした後、「Anvers」駅からメトロに乗り込み、次の目的地に向かった。ジケンが起こったのは、その直後である。

後から振り返ってみると、スリに遭う兆候はあった。それを軽視していた私の不注意でもある。「Anvers」駅の改札口にたむろする数人の若者グループを、私も目撃していた。彼らは、私が財布からメトロのカルネ（回数券）を抜き出し、そして財布をどこにしまうか、ひそかに観察していたのだろう。ホームで電車を待つ間、先ほどのグループがホームの端にいたことも気付いていた。やがて電車が来てドアが開いたとき、座席は満席だったので、私たちは車両中央にあるポールに掴まった。グループも同じ車両に乗り込み、私を取り囲むように立った。電車が動き出したとき、目の前の長椅子に座っていた若い女性が、驚いたような表情をして腰を半分浮かせかけた。私は、それを私たちに席を譲る仕草だと受け取り、「ありがとう。でもいいですよ。すぐ降りますから」と返事した。これも後から考えれば、その女性はスリ・グループに気付いてビックリして立ち上がりかけたのか、あるいは私たちにスリの警告を発したのか、そのどちらかだろう。たぶん、前者だ。

私はその女性に見惚れて注意を逸らしているうちに、電車は緩やかなカーブを曲がって少し揺れた。スリ・グループは、どこで電車が揺れるのか、熟知しているのであろう。そのタイミングを見計らって、私の左側にいたグループのひとりが、軽く私に覆いかぶさるような気がした。次の駅「Barbes-Rochechoaut」で電車は停まり、ドアが開き、乗客が乗り降りした。グループも降りた。ドアが閉まる寸前、グループのひとりが急に私を振り向き、「I picked up your wallet.」と言って、私に向かって何かを投げた。床に落ちたのは私の財布だった。そのとき初めて、スリの被害に遭ったことに気付いた。中身をすぐさま調べると、現金とカルネのみ盗まれ、クレジットカードは無事だった。正直、ホットした。現金はともかく、カードがないと本当に困る。スリは、少額のお金だったら警察に届け出ないだろう・・・届けたとしても、警察は捜査しないだろう・・・と考えているに違いない。また、もしクレジットカードまで盗むと、カードから足がつく可能性はある。カード会社も捜査を警察に強く働きかけるだろう。スリは、そうしたことまで計算して悪事を働くのだ、と推測する。

こんなことはあろうかと、私は旅行するとき、現金は旅行ケースやリュックやバッグに分散しておくので、被害額は3万円相当のユーロだけで済んだ。しかし妻は、「きれいなパリジェンヌに目を奪われていたからでしょう」と言って私を優しく睨んだ。

悼まれる死・悼まらない死

パリ滞在中も最後に近づき、明日は日本に帰るといふ日、パリ北西にあるラ・ヴィレット公園からサン・マルタン運河を舟で下り、セヌ川まで行った。

サン・マルタン運河は、1825年に開通した運河。セヌ川に至るまで8個の水門があり、水門を通るたびに水位を変え、全長9Kmを3時間かけてゆっくり進む。運河の両側には、おしゃれなカフェやバー、読書や日光浴を楽しむ人々の姿が展開し、「パリの日常」を垣間見ることができる。

運河を楽しんだ後、パリ同時多発テロの現場のひとつ、バタクラン(Ba ta clan)劇場の跡地を訪問した。パリ同時多発テロは、サン=ドニにあるサッカー場やパリ10区と11区のレストランなど、6カ所でほぼ同時に発生したテロ事件である。死者130名、負傷者300名以上の大惨事となったが、なかでもバタクラン劇場は、武装グループとパリ警視庁の特殊部隊の発砲に至り、死者90名という最大の犠牲者を数えた。

バタクラン劇場はサン・マルタン運河沿いにあり、最寄り駅はメトロ5号線の「Oberkampf」駅。フランス革命の勃発地バステューの近くである。駅から徒歩数分のバタクラン劇場は、改修工事のために建物全体がシートで覆われていた。激しい銃撃戦を思わせる焼け焦げた壁や散乱した椅子やガラスが、そのまま残っていた。花束がひとつ、跡地の道端に置かれていたが、通行人は何事もなかったかのように通り過ぎる。私たちは、法華経の題目をあげ、犠牲者のご冥福をお祈りした。



バタクラン(Ba ta clan)劇場のカフェ側の跡地。工事に備えて立ち入り禁止となっていた。一束の花が、道端に置かれていた。

妻と小学5年生の双子の孫娘。

塩尻和子氏は、随筆『テロと紛争の解決法を考えるために・・・相互理解と共存の確立を』の中で、こう書いている。

“宗教の暴力の背景はさまざまであるが、基本的には「不変の神の意思」を背景にしていると考ええる。一般に犯罪者の心理には、自分が「悪」を行っているという罪の意識が潜在的にあると考えられているが、宗教的暴力の実行者には、そのような犯罪者意識は見られない。彼らは、少なくとも暴力を実行するその瞬間まで、神の意思に従うという自らの信念に忠実であり、だれよりも真摯で敬虔な篤信家である。彼らは自己の不当な欲求の充足のために暴力を実行するのではない。(中略)

宗教的暴力はまた、「来世」思想とも結びついている。みずからがどのようなことになるうとも、来世では永遠の生命が与えられるという教義は、彼・彼女を勇気付ける。「来世の約束」は、宗教に

独自の思想であり、あらゆる社会の掟を超える。誤解のないように言うておくと、こうした宗教的暴力は、ある条件下では、あらゆる宗教に生じる可能性があり、特定の宗教だけに発生するものではないことを、私たちは肝に銘じなければならない。

このような現状のなかで、あらためて注目しなければならないことは、宗教によって異なる人間の「命の価値」の差である。いわゆる「イスラーム国」やアルカイダなどの戦闘行為は、国際的には「テロ」と見なされているが、人命を奪う行為としては、欧米の有志連合が行う戦闘行為も、過激派が行う戦闘行為にも、良し悪しの区別はないということである。(中略)

パリやベルギーの被害者は、世界中から手厚く悼まれるが、中東地域の一般市民の死は、いつも悼まれることなく、彼らの悲劇は、いつも忘れられやすい。「悼まれる死」と「悼まれない死」との、その命の価値の差異の大きさが、武力攻撃とテロという報復の連鎖を生むことにもつながる。報道では誰もいわないけれど、決して忘れてならないことは、シリア、イラク、イエメン、リビアなどの紛争地では一般市民や子ども達が、毎日のように、ベルギーのテロ事件のような攻撃に曝されているということである。“

私が塩尻氏のこの文章を引用したのは、その主張に私も同意するからである。

9. 海老名市と「地球のステージ」共催の市民講座「イスラームを知ろう」

「還暦を過ぎた旅と小さな出会い」第1回の「1. 東日本大震災のボランティア活動」の「閑上(ゆりあげ)の記憶」で紹介した桑山紀彦医師は、2016年4月、海老名市に心療内科医院「こころのクリニック」を開業した。不眠症に悩む妻は、以前は別な診療機関で治療を受けていたが、桑山医師が開業したことを知ると、このクリニックに変更した。妻の診察券を見ると、4番目の患者となっている。

桑山医師は50歳過ぎだが、若い時代にはバックパックを背負って東南アジアやインドを放浪した。精神科医としての医師免許を取得してからは湾岸戦争のイラク、和平後のカンボジア、内戦下のソマリアなどで心の傷(トラウマ)に苦しむ人々、特に子ども達のケアに取り組んできた。現在は、ライブ音楽と映像、スライドを組み合わせた非営利コンサートステージ「地球のステージ」を立上げ、1年の半分近くをパレスチナ、東ティモールなどに出かけ、心理社会的ケアを必要とする子ども達に向き合ってきた。近々にポーランドにも出かけ、ウクライナ紛争で難民となった子ども達へフラッシュバックと呼ばれるPTSD(心的外傷後ストレス)のケアにも当たると聞いた。

2017年12月、海老名市は「地球のステージ」と共催して市民講座「イスラームを知ろう」を開催した。海老名市民と近郊に住むムスリムとの交流を図るのが目的だ。



市民講座「イスラームを知ろう」の終了後、桑山医師(中央)を囲んだ私の家族。

桑山医師に誘われ、私たち家族も市民講座に参加した。初めに桑山医師が、2016年にパレスチナの子供たちへ行った PTSD 医療活動を映像と音楽で紹介した。その後、海老名市とその近郊に住むムスリム4人がステージに上がり、イスラームをやさしく解説。最後はフロアからの質問タイム。

フロアからは、案の定、「なぜイスラームでは豚肉を食べないのか？」という質問が出た。この質問に対し、ムスリムの4人はどう答えていいのか分からず、互いに顔を見合わせて思案顔。そこで、代わりに答えたくてウズウズしていた私は、司会者と桑山医師の許可を得て、マイクを握った。そして、塩尻先生から教えてもらった知識を、知ったかぶりして披露し始めた。小学六年生の双子は恥ずかしいのか、私の袖を引っ張って止めて欲しいというそぶり。しかし、疑問をそのままにしておくわけにはいかない。

“豚肉を食べないのは、元々はユダヤ教のコーシェルという厳しい規律から来ているといわれています。なぜ豚肉を食べないのか、それはいまとなってはよく分かっていません。後付けの理由となりますが、最近も発生した豚(トン)コレラに見られるように、他の家畜と比べて病原菌を運びやすいからです。また、肉が腐りやすいことも理由かもしれません。中世ヨーロッパでは樽に豚肉を詰めて大量の塩に漬け、食料不足の冬に食べていました。しかし、しょっぱいうえに臭いがきつく、とても食べられたものではなかったそうです。インドから香辛料を輸入する遠因を作ったともいわれています。

しかし、1930年代、40年代のソ連時代に中央アジアに住んでいたムスリムは、スターリンによる食料配給の際、いじわるされて豚肉しか配給されませんでした。豚肉を食べないで餓死するか、食べて生きながらえるべきか、イスラームの法学者に相談しました。そして、生きることが、神・アッラーの御意志に沿うという判断をし、豚肉を食べたのです。そのため、中央アジアのムスリムは、今日でも豚肉やハムを食べます。

私が言いたいことは、イスラームと聞くと、会場にいる多くの人は、戒律が厳しく、暮らしにくいと思っているかもしれませんが、実は、柔軟な宗教なのです。そうでなければ、1400年も続くはずはありません。”

私は大きな声で、マイクがなくても会場全体に響く声で話してしまった。ステージにいたムスリムは、私を、親愛の表情で(私の勘違いかも・・・)見た。

こんな出来事があったので、講座終了後、ムスリム家族に誘われ、一緒にハラール・カレーを食べた。双子には、さまざまな文化に少しでも触れて欲しいと思う。

ハラール・カレーを食べた後、ムスリム家族の少年たちと一緒に。



(次回号に続く)